

汲古一心

『弘法大師の書に想う』

二 真言世界観に立つ大師流

長安青蓮寺の恵果和尚の遺託もあり、日本に新仏教流布の熾烈な意欲を持って帰朝した大師は、その祖国の民族としての信仰ともかまがえ合わせて、莊嚴な密教を普及するのに伴い、大師の書は書もまた何か信仰的なものとして受けとられてきたものではあるまいか。大師以前の日本書道は、いわゆる中国の正統書派とする王羲之系のものが主で、仏典でも政治記録でも、往復文書でもことごとくこの端正な楷書、行書の範囲のものを出なかつた。わずかに行草に亘って、聖徳太子の義疏の稿本が、珍しい個性をお示しになつてゐるくらいであつた。

それを大師は、仁和寺伝存の三十帖冊子などに見るような、学問としての用の文字は、特に大師の特色として大きく取り上げられる筆法ではなく、いわゆる中国・日本の伝統正脈の書風で、淡白平明に書かれてゐる。決して旧来からの正脈書風を捨ておられるのではなく、この正脈を基盤として、さらに奔放に中唐に拾われた新書風を取捨し、創意を加えて芸術的に構成されたものが、初めて日本鑑

賞書道の新分野を展開してゆかれたのであると思う。

これが宮殿の扁額に現れたり、神社・仏刹の題字などに書かれたり、あるいは碑稿・巻子の鑑賞物など大衆の眼を惹くものに表現されると、その多彩な意匠は批判を浴び、またその模倣も行われて、新しい流行を呼ぶとともに、その自由な躍動性の文字は、この辺から日本にも鑑賞のための書も存在すべきであるという意識の確立を示唆したのである。

後人の模倣はやがてひとつの型となり、呼んで日本の入木道とか大師流とか称せられて、さらにこれを実用文字にも応用しようとする姿を示してくる。

真言世界観に立つて——というほどの次元で創出されたものを、意識の方は措いて、後人がこれを技巧の点で生活文字に応用しようするには、およぶべからざるものを感じたに違いない。

したがつて、その執筆の法とか、点画の姿態の一部で、特に奇異の興味をそそるようなものだけが、採り入れられて大師流の学統は次第に、大師信仰の拡がりに伴いつつ用の面にも普及していった。

(つづく)

〔「大法輪」昭和四十八年三月〕

〔筆間雜記〕中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。

大鵬一舉九萬里

南冥由北極乎三千一里
六月且者有也
可眞亦月の上屋居士

「大鵬一舉九萬里」(莊子) 昭和四十九年